

TAKE FREE

富士北麓の輝きを知るフリーマガジン

シルベ!

@

巻頭特集

do sports!

北麓彩るスポーツの秋

vol. **02**

2016 秋

グルメ特集

食欲の秋 山梨の肉

エリア特集

歴史は1200年! 富士河口湖町河口

連載

私は、北麓を選んだ。



巻頭
特集

do sports!

北麓彩る スポーツの秋

富士北麓に、秋がやってきた。厳しい冬が来る前のこの季節、北麓はスポーツが花盛り。シルベ!編集部は、スポーツを自ら楽しむ人、スポーツの場づくりに取り組む人に会いに行ってきた。見えてきたのは、この土地だからこそ、いっそう輝きを増すスポーツと人の姿。あなたもきっと、始めたくなるはずだ。



富士吉田陸協ランニングチーム

勝利の美酒をめざして
北麓の自然を駆け抜ける



①夜の忠霊塔をひた走る②合宿にて、湖をバックに富士山を走る③お決まりの勝利の舞?④そして、お待ちかねの宴会。走った身体にしみわたる!

午後6時30分。昼間のにぎわいが嘘のようにひっそりとした、富士吉田の新倉浅間神社。カラフルなウェアに身を包んだチームの面々が、夜闇から現れた。
「上まで一緒に行きましょうか!」
話もそこそこに、記者に声をかけたメンバーは、さっそくランニングスタート! 神社から、山の上にある通称・忠霊塔までの往復を繰り返すメニューだ。
「いまは、12月の県下一周駅伝を目指

して練習中。毎週水曜のこの時間に集まってるんです」と、上り坂を涼しい顔で走るメンバー・高野淳一郎さん。
およそ20人のメンバーが走り始めた理由はさまざま。中には、スポーツ経験ゼロで走りはじめた人もいる。自然に恵まれた富士北麓は、富士登山競走をはじめランニングの大会が多く、トップクラスの選手がこぞって合宿に訪れるランニングのメッカ。三つ峠に杓子山など、トレイルラン（山岳マラソン）の格好のフィールドでもある。道を歩けばランナーに出会う、この地域の環境は、新しいランナーを生むきっかけになっているようだ。
11月6日には、彼らがコースづくりから携わった「第1回富士吉田杓子山パノラマトレイルラン」（大明見小室浅間神社スタート）杓子山山頂ゴール）も開催。富士北麓のランニング発展にも汗を流すみなさん、どうやって走ることへのモチベーションを維持しているの? 「そりゃ、レースの後にみんなおいしいお酒を飲むことです（笑）」
遠征や合宿などもあり、連帯を深めるメンバーの雰囲気は明るい。
「それに、気持ちよく送り出してくれる家族の存在も大事。走れる喜びを感じながら活動していきます」



本栖湖スポーツセンター

新しい視点で

生まれかわるスポーツ拠点



県立本栖湖青少年スポーツセンターが、50年の歴史に幕を下ろしたの昨年のこと。利用者減少に施設の老朽化も重なり、閉鎖・解体が決まっていた。だがこの夏、奇跡が起こる。「本栖湖スポーツセンター」として、見事復活を果たしたのだ。

「こは、すごい可能性を秘めたところなんですよ！」

そう熱っぽく語るのは、運営を担う「Rproject」の金子愛さん。千葉県に本社を置くこの会社は、使われなくなった施設をリノベーション（改修）して、合宿の拠点として地域に人を呼び込もうと活動している。

彼らが本栖湖に目を付けた理由は、スポーツにぴったりの冷涼な気候と、開発がほとんどされていない点。周囲を気にせず、自然豊かな環境で合宿できる魅力的な土地なのだ。

「トラックつきで敷地は広いし、建物

は耐震性もあっておもしろいつくり。古くても、視点を変えればすごく価値がある施設です」。こう話すマネージャーの加藤周一さんをはじめ、働くスタッフの八割は県外からの移住組だ。

「不便は不便ですけど、自然の中でのそぎ落とされた生活は、本来自分が欲していたもの。すごく贅沢な暮らしをしていると思うてます」とは、スタッフの西村遊さん。なんとも心強い。

オープンから数カ月。口コミで評判は広まり、企業の社内運動会など利用者の幅も広がりつつある。地域に向けた活動にも取り組むメンバーは、さっそく小学生向けのサッカー大会を主催。アイデアは尽きない。

「指定管理者としての契約は20年。まだまだ先は長いです（笑）。『本栖湖っていいな。また来よう』って思ってもらえるように頑張っていきます」



①全天候型トラックつきの広大な敷地②③④味のある雰囲気を生かし、リノベーションされた館内

静寂に包まれた西湖に、銀輪が空を切る音が響き渡る。揃いのジャージでさつそうと現れたのは、チームコバリンのメンバー。アスリートのような風格が漂うが、みなさんはプロ!? 「いえ、うちは未経験者ばかりのチームです。定年退職後にはじめた人だっているんですよ」

と、リーダーの佐藤清次さん。その言葉どおり、年齢層は10代から60代までと幅広い。他のスポーツよりも身体への負担が少なく、親子や夫婦で楽しんでいるメンバーも多い。

富士北麓公園から五合目をめざす、毎年6月の「Mt.富士ヒルクライム」など、レースにも多数出場。今季から実業団チームとしての登録も果たした。

老若男女、さまざまなレベルのメンバーをつないでいるのは、無料通信アプリのLINE。グループ内で、次の練習や大会の情報を共有しながらコミュニケーションしている。約40名の大所帯だが、自由な雰囲気の中で活動しているようだ。その楽しさとは？

「自転車で風を切るスピード感は最高です。想像以上に早く走れる。それに、仲間といつでも走れるこの環境は、楽しさの幅が広がりますね」

練習フィールドは、湖畔のほか、富

チームコバリン

世代超えた仲間と北麓の風を切って走る



士山へ至る滝沢林道など、起伏に富み、自然豊かなコース。自動車も少なく、ロードバイクにとっては絶好の環境だ。富士北麓だからこそ味わえる自転車の醍醐味なのかもしれない。「うちは初心者養成所。いろんな人に自転車を楽しんでもらえたら」とは、小林輪店(富士吉田市)の店主で監督の小林康雄さん。30年目を迎えるチームは、仲間の輪を広げながら、今日も走り続ける。

①湖畔を疾走する姿はアスリートそのもの②富士五湖が一望できた③チームジャージ④頑張った後のフレイクタイム。自然と笑顔がこぼれる





写真提供 / 富士河口湖町



エリア特集

河口 1200年の文化とアート



今回取り上げるのは、富士河口湖町の河口エリア。河口湖の北側に位置し、世界遺産の構成資産である「河口浅間神社」が鎮座するほか、河口湖オルゴールの森、河口湖美術館といった博物館・美術館が軒を連ねる。その歴史をひもときながら、街を歩いてきた。

明治15(1880)年、イギリス人冒険家のヘンリー・ギルマールが訪れた河口地区。街道沿いに整然と家屋が並び、水路も整備されている。
出典：小山騰・編「ケンブリッジ大学秘蔵明治古写真」(平凡社)

河口について話す前に、まず読み方を「わ」を強調する埼玉の「川口」とは違って、神奈川の「川崎」と同じく、平らに読むのが正解！

河口地区は、河口湖周辺で一番歴史が古い。官道(古代の国道)「甲斐路」が通って、この街が宿駅になったのは約1200年前。世界文化遺産の河口浅間神社にも守られながら、宿場町としてにぎわった由緒正しい街なのだ。中世からは、富士登山者の宿や食事の世話をする「御師」の街に。最盛期は100を超える御師の家があった。地区に現存する「額谷」「貴家」「駒谷」などの珍しい苗字も、御師がルーツだ。

ただ、昔は湖がたびたび増水して、水害に見舞われた過去も。家の1階が何年も水浸しになることもあったらしい。そんな状況でも、家の2階同士に橋を架けたり、ここぞと釣り糸を垂らしてみたりと、河口の住民はとつてもクリエイティブ！ 戦後になってからは、湖岸を干拓して陸地を伸ばす事業に着手。農地にして食糧を確保したのはもちろん、河口湖美術館や河口湖オルゴールの森などのミュージアムを誘致して、一大観光エリアをつくった。文化とアートが光る、そんな河口地区の魅力。次ページでさらに紹介する。

シルベ!

記者が歩いた河口マップ

シルベ！記者が歩いて探したさまざまなトピックを、マップとともに一挙紹介！

まるで異世界！

「山梨最古」の河口浅間神社

河口を語るのに外せない河口浅間神社の創建は、865年。「貞観の噴火」と呼ばれる、富士山大噴火の翌年だ。湖を埋めるほどの噴火を鎮めるため、朝廷は当時駿河だけで祀られていた浅間大神（＝富士山の神様）を、甲斐でも祀るよう命令。それを受けて、いまの河口浅間神社がつけられた。

のちに朝廷がつくった神社リスト「延喜式神名帳」では、全国最高位の「名神大社」にランクインしたスゴイ神社なのだ。しかも、千年続く伝統芸能「稚児の舞」に、樹齢千年の「七本杉」、千年前から富士登山者が身を清めた「母の白滝」など、伝統が大切に受け継がれ、保全されている。

「でも、その割に人影がまばらだと思いませんか？」
と話すのは、河口浅間まちづくりの会の中村太一会長。たしかに、神社周



中世には鎌倉街道の宿場、そして御師の街となった河口。道の端々に残る石仏や水路(呑川)跡が、当時をしる。のぼせる。



Topics

よみがえれ！ 3つのかがり火 上の坊 project

このページのイラストマップ。現在は存在していないものが3つだけある。それが、山々に輝く「大」と「天」の文字、そして、鳥居の形だ。

これは、江戸時代、富士山の山開きに合わせておこなわれていた、かがり火行事の想像図。この行事を復活させようと活動しているのが、富士山信仰の絵札をデザインしたTシャツ作製な

ど、河口の魅力発信に汗を流す「上の坊プロジェクト」だ。代表の外川真介さんは、

「河口は文化の中心だった街。埋もれている歴史を発信していくために、かがり火を復活させたいんです」と話す。

その「現代版かがり火」は、水銀灯を用いるなど様々な工夫を加えて、数年以内に実現させたいという。富士山に登った道者たちが、感動の中で見下ろしたであろう、美しいかがり火。その復活で、河口の街が沸き立つ日が待ち遠しい。

「人が集まる美術館通りから、神社まで歩いてきてもらえる仕組みをつくれるよう、案を練っているところです」と中村さん。会では、神社の祭りの再興や、周辺の景観づくり、観光拠点づくりなどを、町と一緒に進めている。地元住民がもっと神社を知ること、活動はさらに前進していくはずだ。



景観配慮型のコンビニ店舗。神社周辺の景観づくりに、企業が賛同してくれたそうだ。



まだある！

河口のみどころ



うめやアネックス

御師の家「梅谷」が今年、ゲストハウスとして140年ぶりに営業を再開。オーナーで27代目の本庄元直さんは、浅間神社の神主もつとめる。1室(2名)7800円〜。

富士河口湖町河口1129 ☎0555-76-5181

木工模型工房

観光客でにぎわう「もみじ回廊」。その西側に突然現れるのが、木製のゼロ戦だ。御年82歳の早川さんが手作りしたもので、隣の作業場では作品の販売も。営業は不定期。



カフェすずきのき

河口浅間神社の参道にある、古民家を改築した喫茶店。店内はゆったりした空気が流れる。手作りのケーキや麹甘酒のほか、グリーンカレーも人気。

富士河口湖町河口9 ☎0555-76-7453